

# 月刊 わらじ 3月号

## 特集 へんしゅう



二〇二六年三月一日 毎月一回一日発行 通巻五七〇号  
一九八四年十月四日 第三種郵便物認可 頒価二〇〇円

三枚組みの写真は、まず右から。背中を見せているのは月刊わらじ異優子編集長で、スマホで原稿依頼をしているところ。向かいはお両親。毎月第1火曜夜の異宅編集作業が終わりかけ、立ち上がった所に、留守電に気が付いた常連執筆者からの電話があり、対応をしているところ。

この執筆者は、かつて1年間ボランティアとしてわらじの会に滞在し、編集作業にも参加していた人で、月々の特集テーマに即して、現在の日常をマンガに描いて送って来てくれる。

特集テーマは、その日に異宅で、ほとんどは編集長のつぶやきから生まれる。それから編集長が、編集部員のスマホを用いて、電話依頼する。そのほか、編集部員がメール依頼したり、その月の月刊わらじで特集テーマを告知する。

異宅ではいつもおいしい夕食とコーヒーをいただき、その後ふすまを閉め切って、編集作業に集中する。原稿依頼の電話のやりとりはふすま越しにご両親の耳にも届いて、「よく分かりますねえ」、「皆さん書いてくれるんですねえ」とコメント。

左上の写真は、異家が外壁に設置している陶板製のプレート。左下の写真は、その月刊わらじを自らの個人誌として認識する橋本克己画伯が、異宅に月刊わらじを配布しに来て、編集長が丁寧に受け取っているシーン。

月刊わらじが人と地域を編集する。

# 小さな新聞 3月号

THE CHIISANA SHIMUN 2026年  
第0064号(月刊)わらじの会26  
発行所  
わらじの会

地域へんしゅう  
ケアシステム  
を  
わらじ

## 共に働く街をめぐります自治体へ

### 三市を訪問し提言と懇談

昨年12月14日に開催されたNPO法人・障害者の職場参加をすすめる会の「共に働く街を創る集い」の最後で提案された「共に働く街をめぐります自治体提言」を近隣3市に持参し、首長や担当職員の方々と懇談を行う訪問活動が行われた。2月12日は、春日部市と草加

市。16日は越谷市。草加市と越谷市は市長も交えて。提言は、「地域で共に学びたい本人・保護者を応援できる手引きを」「共に働き、共に暮らす地域を広げるために地域適応支援事業の普及と充実を」「市役所及び市の公共事業で共に働く職場を拡大し、その経緯を地

域に役立てること」「各世代の支援計画、都市計画に反映を、県・国の施策に反映されるよう取り組みを」など。越谷市の福田市長は「障害のある人となない人が同じ職場で働いているという全国的にも珍しい地域適応支援事業を充実させていきたい」とSNSでも発信した。

わらじの会が発足して8年。生き延びてきた人たちが高齢になってきた。筋力も衰え、身体も何らかの不調の増えてきた人もいる。介助者も複数の事業所から入っているし、訪問看護・訪問医療を利用している人もポチポチいる。

小さな事かもしれないが、例えば、血圧の薬や、消炎剤など、いつの間にか薬の種類が増えて「〇種類にもなっていたり」。一堂に会してあれやこれやと話し合えばよいのだから、それがなかなか難しい。わらじの会の野島久美子さんがよく嘆いているのだが、「地域が施設化」している？

◆三上麻衣さん、急ぎました。

◆金うゆかりさん(熊本市)社会福祉士に。パタパタ2月4日卒業を祝う会が行われ

◆埼玉県障害者スポーツ協会設立20周年式典で(株)ニューオ(二ヶ尾谷社長)に感謝状が贈呈。

◆小川初美さん(輝明さん母)おそくなりました。

◆木下あきら(雅明)

◆

◆

◆

◆

◆

◆